

日本の歴史的関係を 雅楽の側面から垣間見る

元神奈川大学講師、平安楽倶楽部雅楽研究所所長 長谷川景光（会員）

雅楽は複合的芸能

皆さん。雅楽をお聴きになつたことはありますでしょうか。

雅楽で一番耳にする曲が、越殿樂（えてんらく）という曲なの

ですが、この曲は結婚式場の神殿で新郎新婦が三三九度の盃を交わす際に演奏されたり、CDで音楽がかけられたりする祝賀曲です。しかし、平成に入つてから中小の結婚式場では神殿が撤去され、これに替わってチャペルが付設されるよう様変わりしていきますので、越殿樂ではなくお聴きになる機会は少なくなつてしましました。

馬楽（さいばら）が代表的なジャンルです。因みに、私の専門は横笛なのですが、唐樂の時

一方、雅楽の曲名で一番有名なのが千秋樂なのですが、お聴きになつたことがある方はまずいらっしゃいません。ご承知の

とおり、相撲や歌舞伎、そして舞台の最終日を意味する言葉として遣われています。

さて、雅楽の特徴を一言で言い表すならば複合的芸能なのであります。具体的には、前述の越殿樂、千秋樂といった唐樂を筆頭

つまり、外来の芸能と国粹の芸能、儀礼の芸能と宴の芸能など、歴史も縁起もまったく異なる芸能をひとまとめにして雅楽と総称されています。

雅楽は一四五〇年以上の歴史

それでは、雅楽という概念は

読漢字として知られている平安



時代の「雅楽寮」は「うたまいのつかさ」と読みます。一方、「源氏物語」では「御遊び」、「管絃」、また単に「樂」と表現されており、当時、雅樂（ががく）という言葉が遣わされていなかつたことが分かります。

実は、雅樂（ががく）という

言葉は、正式には明治時代に確立された概念であり、また雅樂という単独の音楽は存在しないのですが、日本の雅樂の歴史は一三〇〇年に及ぶなどとも言われます。これは大宝元年（七〇一）に制定された大宝律令により雅樂寮が設置されたことをもって雅樂の起源としているからなのです。

しかし、『日本書紀』における記載では、允恭四二年（四五三）に允恭天皇崩御の喪礼のため新羅から多数の楽人が遣わされたとの記載があり、また宣化一年（五五四）に百濟から四人の楽人が役目交替のため渡来したとの記載があります。前者は一過性の渡来楽人ですが、後者は常設的楽人として位置づけ

られ、少なくとも六世紀以前には渡来雅樂が定着していたことになりますので、このことから雅樂は一四五〇年以上の歴史があると位置づけられます。

日本の雅樂は中国の俗樂

さて、奈良時代の日本は、シリクロードの終着点であったこ

とからさまざまな国の音楽が伝わりました。例えば、天竺（インド）の婆羅門僧正菩提遷那と林邑（ベトナム）の僧侶である

仏哲が天平八年（七三六）に渡来し、八樂を伝えたことが知られていますが、その天竺樂、林

邑樂の他、胡樂（蒙古、西域）、渤海樂（満洲）、度羅樂（アフガニスタン）の都貨羅、タイの吐火羅、ビルマの墮羅、濟州島の耽羅の四説あり）などが伝来しました。

私の最近の研究では、この他にウズベキスタン、インドネシアから伝わった曲もあります。つまり、雅樂とは古代に存在し、世界的にも歴史的にも例を

見ないインター・ナショナル・ミュージックだったのです。

と、ここまで書くと雅樂は貴重で希有な存在であることがお分かりいただけたと思うのです。が、意外な事実があるのです。それは、唐の国から伝わったの雅樂、すなわち雅正の樂ではなく俗樂だったということなのです。

これについて、東京藝術大学の柘植元一名誉教授は、ビデオ『雅樂』の解説に次のように書かれています。

「わが国に伝えられている雅樂はもともと外来の樂舞であつた。これは唐代の中国宮廷で行なわれていた宴饗樂（宴饗雅樂）が渡来したものである。この日本に伝えられた雅樂は確かに広義の雅樂ではあるが、実は本来の中国の狭義の雅樂ではない。」

と、意外に思われる向きがあるかも知れない。その理由は、古代中国では雅樂が儒教の祭礼樂を意味したからである。中國では宗教儀礼のための雅樂と、宴饗のための謳樂（えんが

く、燕樂、宴樂とも書かれる）とを区別していた。前者は正樂つまり雅樂の樂として、後者は俗樂として分類されていた。俗樂は胡樂をも吸収していった。

胡樂は中央アジア・西アジアなど西域の樂舞で、漢民族にとっては外来音樂であった。こうした起源を異にするさまざまな樂舞の様式が宴饗樂にとりこまれており、それが日本に中国の雅樂として伝えられたのです。

このように、多くの国から唐の都に伝えられた俗樂こそが日本の雅樂であったのですが、先ほど雅樂のルーツは中国であると前に記しました。中国から伝來した樂を唐樂と言い、別名は左樂、その舞を左舞と言います。これに対して右樂である高麗樂は朝鮮伝來の樂とされるのですが、韓国でも雅樂が伝承されており、韓國雅樂は唐樂と國樂に分類されます。

つまり、中国からダイレクトで伝わったか、朝鮮経由であつたかの違いであって、雅樂の主体的ルーツは、やはり中国であ

ると言えるのです。

厄介な和魂漢才

さて、私が一番厄介と考える四文字熟語が和魂漢才です。以下に、『日本大百科全書（ニッポンニカ）』（小学館発行）からの長い引用をご紹介します。

——日本思想上の用語。和魂漢才是平安中期に生まれた思想で、当時は「やまとだましい」からざえ」といった。中国渡來の正確鋭利な知識（漢才）もたいせつだが、日本社会の常識に通じ臨機の処置をとれる人柄（和魂）もまたたいせつというので、いわば専門と教養との兼有を説くもの。『源氏物語』に「猶（なほ）ざえをもととしてこそ、やまとだましの世にもちゐらるるかたもつよからめ」とみえるのはもつとも早いほうで、『大鏡（おおかがみ）』『今昔（こんじやく）物語集』『愚管抄（ぐかんしょう）』などに蒙古（もうこ）襲来からおきる

日本神国思想は、これに一変化を生じる。室町時代成立の『菅家遺誠（かんけゆいかい）』はその典型で、「一、凡（およそ）神国一世無窮之玄妙者……」「凡国学所要……和魂漢才……」とみえ、神国は至上で漢土の革命の国風と違う、日本の研究はかならず和魂漢才を兼具する必要があるという。この書は、平安前期の和漢兼修の大学者菅原道真（すがわらのみちざね）に仮託された偽書であるが、中世の人々が漢土に学ぶとともに日本の特性に注意し自覚をもつことを説いたのがよくわかる。「わこん・かんさい」という語はここで確立した——

なぜ厄介かと言うと、和魂は良しとして、漢才は「かんさい」「かんざい」「からざえ」「からざい」などと読み方がさまざまもあり困惑してしまうのが第一で、第二には引用文からもお分かりいただけるよう、この熟語が日中の歴史的関係を如実に表すとともに、良い意味にも悪い意味にも捉える

ことができる言葉だからです。

雅楽全盛期で

あった平安時代において、雅楽

は漢才の象徴的な存在であり、遣唐使によつて

唐の都より楽、舞が伝えられ、

楽器、楽譜が持

ち帰られまし

た。考えてみれば、日本が狩猟

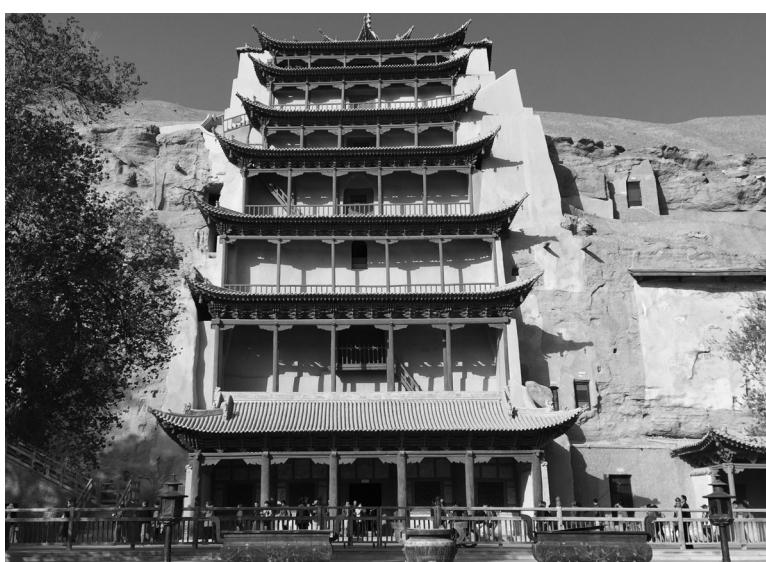
採集の生活をおくっていた縄文

時代に、中国では最古の編年体

の書物である『春秋』が編纂

されており、著しい文明格差が存在していたことは事実です。

中国でも宮廷音楽の研究が盛んに



敦煌莫高窟

では、本家本元である中国に

おいて雅楽、すなわち宮廷音楽

らっしゃると思います。

莫高窟の仏像や壁画が見事であるだけでなく、壁を塞いで隠されていた敦煌文書が唐代以前の貴重な資料であり、その学術的価値の高さによって敦煌学という研究領域が生まれたほどでした。この、敦煌文書が壁を塞いで隠された経緯については、二つの説があります。一つは、敦煌が西夏により占領された際

に經典を焚書されることを恐れました。この、敦煌文書が壁を塞いで隠された経緯についても、いわば価値のないものをとりあえず置いておいたという説です。そして、現在、定説となっているのは二つ目のほうなのです。

私の見解は両者の融合説で

す。つまり、西夏の軍団が迫り来るなかで、貴重な經典を含む書物、書類を隠すことを命じら

れた者は、取捨選択している時間的余裕などなく、壁の擬装にて隠したという説。二つ目は、不要なもの、いわば価値のないものをとりあえず置いておいたという説です。そして、現

在、定説となっているのは二つ目のほうなのです。

敦煌琵琶譜を筆者が解読した演奏譜

敦煌琵琶譜を筆者が解読した演奏譜

その研究の足がかりになつたのは、日本の雅楽譜であり、正倉院に保管されている中国から渡ってきた楽器なのです。で

して、キーワードは焚書な

いのです。さらに、中国

共産党の初期体制下では

宫廷音楽の研究、復元など認めませんでしたが、

一九八〇年代に敦煌琵琶

譜ブームが沸き起こり各種の研究書が出版される

ようになりました。

その研究の足がかりになつたのは、日本の雅楽譜であり、正倉院に保管

された者には、取捨選択している時

間の余裕などなく、壁の擬装にて隠したという説。二つ目は、

不要なもの、いわば価値のないものをとりあえず置いておいたという説です。そして、現

在、定説となっているのは二つ

のだと。

そして、キーワードは焚書な

いのです。中国の歴史は、アン

でなく古楽譜、古楽器の

類はほとんど遺っていない

のです。さらに、中国

の「新撰樂譜」、藤原師長著の『三五要錄』、『仁智要錄』など

との比較研究がなされていま

す。

さて、世界の文明は幾何級数的に高度化を加速しています。

そして、二〇世紀に起った事象の回数と影響力の乗数を悠に凌駕する事象が二一世紀に起こることは必然です。さらに、「歴史は繰り返す」ということ

も避けられないのではないで

しょうか。

私のような偏向的分野に携わり微力な者ができることは、雅楽の演奏をすること、古楽譜の解説をすることぐらいなのです

が、それが日中の文化交流、共同研究につながることにより、友好を深める一助になればと願うばかりです。

筆者略歴（はせがわ かげみつ）

1953年生まれ。

元神奈川大学講師。

平安楽舎雅楽研究所所長。